

● シリーズ 私の見た日本 Vol.171

Embracing Japan's public life

JOACHIM MICHAEL L. ESPINA
(ジョアキム マイケル リム エスピナ)フィリピン・セブ出身
建築を学び、Architects Espina-Perez, Espina & Associatesにて2015年より現在まで設計に携わる。サンカルロス大学(セブ)にてアシスタント・インストラクターとしての勤務経験を経て、2016年より札幌へ。現在、北海道大学大学院工学院 建築計画学研究室 修士2年生(2018年9月修了予定)

修士課程入学のために、北海道大学の札幌キャンパスに来てから2年が経った。フィリピンのような熱帯地域の発展途上国出身の留学生として、私の関心が惹きつけられたことは、日本におけるごく普通の日々の生活である。私はフィリピンのセブ島で生まれ、人生のほとんどを過ごしていたため、日本では何ができるのかといつも考えていた。本稿では、私が日本での暮らしを通じてパブリックライフの価値をどのように味わい、またそれらがフィリピンとどう異なるのか考察を述べる。

Four Seasons compared to two

日本でのパブリックライフを面白くするのは、四季の変化である。セブ島を含むフィリピンでは、雨季と乾季しかないが、札幌では、11月から4月までの半年間に及び冬を含めた1年間で全ての季節を感じることができる。季節の変化は時間の移り変わりを明快に気づかせてくれると同時に、一年を通して、何かをすることが楽しみになる。忙しく、ストレスを感じる時にも、窓の外をみると、そこには季節ごとに異なる景色や色彩があり、それらはまるでフォトアルバムのように、ストレスや倦怠感を和らげてくれる。また、例えば春の花見、夏の花火、秋の紅葉狩り、冬の雪まつりやスポーツのような特色のある催事もある。しかし、フィリピンでは窓の外はいつも夏の景色で、時間の移り変わりはあまり感じることができない。予測不能な天気や台風の接近には時々驚かされることがあるが、それはいつも年末や特に長時間働いた日に限ってやってくるのだ。耐えられないような暑さや湿気は、私たちが外へ行って涼みたいという衝動に駆り立てるが、フィリピンでは、公園のようなパブリックスペースが十分ではない。住宅建設の需要や商業開発の優先度が高いためである。パブリックスペースが無いことで、冷房の効いたショッピングモールのような施設や、海辺のリゾート施設で過ごすことになるが、お金が無い場合は、ただ外に出て路上に座り、人々の行動を見て時間を過ごすという、日本ではあまり見ないような文化がある。

四季がパブリックライフにどのように影響するかということと関連して、私はパブリックスペースが四季に応じてどのように人々の活動を受容しているのかを観察した。札幌駅の地下道は一年中、活動の場となっており、特に冬には人々が好んで地下で過ごしていた。小山のある児童公園は春から秋にかけて子どもたちが遊んでいるが、驚くことに、冬にもそ

り遊びの場になっていた。大通公園は全ての季節で多様な活動を提供している。例えば、春のライラック祭り、夏のよさこいソーラン祭りやビアガーデン、盆踊り、秋のオートムフェスティバルや冬の雪まつりなどである。フィリピンでも祭事やイベントはあるが、その活動の数や種類は到底及ばず、もっと日本のようにパブリックライフを楽しむことを推奨すべきである。

Convenience and Necessity

日本では、都市基盤整備や各種サービスが充実していることから、フィリピンに比べてパブリックライフをより楽しむことができる。パブリックスペースへのアクセスに関わる設備や都市基盤は、快適で歩行者本位であることが重要である。日本では、十分な広さの歩道や自転車道などが整備されているが、フィリピンでは、歩道が狭く、歩行に適した幅員が確保されていない。歩道が連続しておらず、途切れてしまうこともあり、歩行者は車道の真ん中で危険にさらされる。また、公共交通に比べて自家用車が好まれている。セブでは、タクシー、バス、ジープニー(第二次大戦後に軍用ジープを改造してつくられた小型バス)が公共交通として利用されているが、いずれも住民の交通需要に対して効率的なものではなく、古く、メンテナンスが行き届いていない。公共交通の不足と自家用車の増加は、交通渋滞を招き、高速道路の建設や道路の拡充により、歩行空間やパブリックスペースの余地を減少させている。

日本では、鉄道が多くの通勤客を含む人々の快適な利用を促進している。加えて、自転車の利用が好まれており、車の運転手からもその存在がしっかりと認識され、尊重されている。自転車置き場も整備されている。自転車は学生のような経済的に節約したい人々にとって大変便利で、また、交通渋滞を招くことがない。私も、大学への通学やショッピングに

自転車を利用し、利便性を大いに実感した。

しかし、私が日本で最も楽しんだのは歩くことだ。フィリピンでは、歩行者よりも車が優先されることや、暑さと湿度、車の排気ガスなどにより歩くことが困難である。日本では、安全で快適に長い距離を歩くことができる。歩くことで、日本をみる視点がより確かなものとなり、多くの知見を得ることができた。私は、実に多様な人々の日々の生活を観察した。道からみえる景色は、住宅街から狸小路商店街のような商業地域や緑道など、都市全体に繋がっている。例えば花や葉の色、降雪のように、その色彩も四季によって絶えず変化する。また、人々の会話や、子供たちの遊び声、小鳥や虫のさえずりなど、道はいつも音で溢れている。日本の人々の行動や活動をみると、歩きながらもものを食べることはなく、道をふらふらと歩いていることもなく、公園にリラックスして腰掛け、夏には屋外のカフェを好み、春には桜の下でお花見を楽しんでいる。これらのことから、私は社会にとってパブリックライフは非常に重要で、市民にとってこれらの経験がいかに積極的な影響を及ぼすかということに気づいた。パブリックスペースで過ごすことは、ストレスを軽減し、リラックスし、社会と交わり、楽しみを覚えることに繋がる。また、それらは、スマートフォンの世界よりも現実世界の美しさや経験の重要性を改めて認識させてくれるのだ。

Learnings and Insights

私は日本での経験に基づき、パブリックライフの充実が、都市の持続的な発展のために重要であると考えた。機能的なパブリックスペースの提供や、アクセシビリティの向上、自然資源の最大化は市民生活を向上させ、都市をよりよいものにする。勿論、パブリックライフの改善においてフィリピンのような発展途上国の文化や状況は十分考慮しなけ

ればいけない。日本での経験の全てがフィリピンで同じように寄与するとは限らない。人口増大による土地不足が顕著なフィリピンにおいて、どこでパブリックライフが実現するのか、路上なのか、あるいは空き地なのか、よく検討する必要がある。人々が路上に滞在するという文化について、近年、フィリピン政府は、これらの行動が相応しくないと判断し、路上での人々の居場所をなくそうとしている。しかし、私は、この路上での過ごし方は、その価値をよく分析し、将来のパブリックスペースのデザインに取り入れていくべき要素であると信じている。

都市のアクセスをよくすることも重要である。多くの人々が「ラストワンマイル」(より生活に身近な最後の部分)における困難の経験

があるだろう。歩行者や自転車の安全で快適な利用を実現する整備が必要である。その他にも、熱帯気候における人々の快適性を考えると、屋外での滞在が屋内に比べてよりよいパブリックライフの経験につながる。さらに、フィリピンにおける2つの季節の特色を、パブリックスペースの計画や活動に十分に取り入れる意識を持ちたい。

日本での日々の暮らしとその中でのパブリックライフの経験は、豊かな生活のあり方を教えてくれた。フィリピンにおいても、このような生活が醸成されるため、人々が自らのパブリックライフを通して、生活様式を向上させることが重要である。

(翻訳/野村理恵)



四季の変化



大通公園の祭



日本の歩道

フィリピンの道路



日本でのパブリックライフ



フィリピンでのパブリックライフ